

すまず拡大される日中人士の交流の中で、新疆維吾爾自治区訪問の門戸も広く開放されつつある(ウルムチが最近外国人に開放された)現在、両書の、より実用的利用も試みられてしかるべきであると思われる。

註

- (1) 李森「維吾爾文字的改革問題」『国内少数民族語言文字の概況』中華書局、一九五四、五九頁。
- (2) Нажип, Э.Н., Т.Р. Рахимов: *Уйгурско-русский Словарь*, Москва, 1968.
- (3) 辞書の例として、Книпов, Ш., Ю. Чиназо: *Уйгурско-русский Словарь*, Ама-Ата, 1961.
- (4) 以下、次のような文献に拠った。唐振宗『中国少数民族的新面貌』三聯書店、一九五三。羅常培・傅懋勳『国内少数民族語言文字の概況』『国内少数民族語言文字の概況』中華書局、一九五四刊所収。前註(1)。朱志寧「維吾爾語概況」『中国語文』一九六四—二所収。鄭達「動態——少数民族語言研究所成立」『中国語文』一九五七—一所収。王利賓・傅懋勳「我国少数民族語言科学研究工作的重要成就」『中国語文』一九五九—十所収。Нажип, Э.Н.: *Современный Уйгурский Язык*, Москва, 1960. 同英訳本 Nadhip, E.N.: *Modern Uigur*, Moscow, 1971.

批評と紹介 林

- (5) 『漢語拼音』《中華人民共和國地図》地名索引』地図出版社、一九七四、附録一、二。
- (6) 前註(5)掲載のものも、今回の『漢維簡明小詞典』のものも、前註(4)の朱志寧論文に掲載された表と基本的に変わりはない。なお、Рахимов, Т.Р.: *Киптайские элементы в современном уйгурском языке, словарь*, Москва, 1970. も参考になる。
- (7) 簡単に断片的ではあるが、ウイグル語文法について中国では、耿世民「試論維吾爾語書面語的發展」『中国語文』一九六三—四、傅懋勳「從音和義的矛盾看現代維吾爾語的發展」『中国語文』一九六五—二、朱志寧「維吾爾語中的漢語借詞」同上五、などがある。

### 中世のシベリア・内陸アジア・東アジア

(アジア東部の歴史と文化、第三卷)

林 俊雄

ソ連邦における東洋学研究は、その伝統を誇るレニングラード、モスクワの種々の研究所でもちろんのこと、地方でのそれもきわめて活発である。わけても注目されるのは、シベ

リアの中心ノヴォシビルスク郊外に建設されたアカデムガラドク(學術都市)にある歴史学・言語学・哲学研究所の活動である。この研究所のスタッフを中心とするシリーズ「アジア東部の歴史と文化」第一巻は、一九七二年に『内陸アジアとチベット』の名で論文集として世に出た。つづいて一九七四年には、西遷後のウイグルに関する中国史料のロシア語訳が、同シリーズの第二巻として出版された。著者マリヤフキン氏の訳註には疑問点も多々あるが、その真摯な研究態度には学ぶべきものがある。さらに、今回紹介する第三巻につづき、巻数は明記されていないが、同シリーズの一冊として、一九七六年には、東アジア全域とインドとの旧石器時代を対象とした論文集が、また、一九七七年には仰韶文化の土器に関する研究書が刊行されている。

ここに紹介する第三巻には、主として北アジアの歴史学・考古学に関する論文一九編が、その対象とする年代の順序におさめられており、執筆陣の中にはノヴォシビルスクの研究者はかりでなく、モスクワ・レニングラードやモンゴル人民共和国の研究者の名も見える。

まず編者ラリチエフ B.E. Jlapueв の序文(五―八頁)に「じぶき」①アルテムノフ C.A. Apтeнoв 「神武天皇―神話的虚構と歴史の再構成」(一九一一頁)は、神武東征を史実

とみなし、その年代については、これを『三国史記』の記述や天皇の平均在位年数の計算などから、紀元後三世紀末から四世紀初とする。②スヘバートル S. Шeвaтoл 「匈奴と鮮卑との間の民族的関係に関する問題について」(二二―一六頁)は、匈奴と鮮卑とは族外婚によって結ばれた同一の民族であったと見なしている。③コノヴァロフ П.В. Кoнoвaлoв 「匈奴の埋葬施設(『一般民衆』墓の発掘資料による)」(一七―四六頁)は、ザバイカルのイリモヴァヤパヂ Илмoвaя пaдц Чeришoмoвaя пaдц Чeрeкyкoвaя пaдц、イヴォルガ Ивoлгa、デレストゥイ Дepeстyи における近年の発掘資料の報告である。墓の構造という点から見ると、イリモヴァヤパヂとチェリョムホヴァヤパヂとは、木棺と木槨とからなる二重構造の墓室であるのに対し、イヴォルガでは木棺だけの墓であり、デレストゥイでは大部分がイヴォルガと似ているが、墓室内部と地上とに石を使う点が異なるという。この差異のよって来たるところについては、報告者は、これは社会構成上の違いか、民族的相違か、あるいは年代上の差か、にわかには決しがたいといい、慎重な態度をとっている。④オクラドニコフ A.И. Oкpaдннкoв 「沿海州出土渤海時代の青銅製小像二体」(四七―五二頁)は、ウッスリースク市付近の渤海の仏教寺院址数カ所における発掘成果を述べたものである。

⑤マリヤフキン A. F. Mal'arkin 「一〇世紀ウイグルと中国との関係に関する中国史料に見られる『貢』という用語の真義」(五三一—五八頁)では、著者は、中国史料を利用する場合には、その中に中華思想的偏向があることに注意すべきであるとし、その例として、甘州ウイグルと五代諸王朝との交渉を記す中国史料の中に見られる「使節」とか「貢物」とかいう表現をあげ、それが実際には「商人」・「交易品」を意味することを述べている。⑥スプルニェニコ F. I. Спруненко 「イェニセイキルギズと唐帝国との交渉史から」(五九—六四頁)では、『会昌一品集』巻六「与紇捺斯可汗書」、巻八「代劉沔与回鶻宰相書意」その他を引いて、唐が中国に伝統的な「夷をもって夷を制する」対外政策によって、北方の遊牧民を巧妙に操縦していたことが指摘されている。⑦マリヤフキン「八四〇—八四八年の中国とウイグル」(六五—八二頁)は、ウイグル可汗国滅亡後中国長城付近に移動したいわゆる南走派ウイグルの顛末を述べている。上記⑤⑥⑦論文は、中国が遊牧民との関係において中華思想をふりかざし、その対処の仕方がいかに独善的であったかを強調するあまり、それが論文の主題であるかのような印象を受ける。

⑧タスキン B. C. Таскин 「中国の帝位についた契丹皇帝」(八三—九八頁)では、遼の太宗が石敬瑭を援助して燕雲十六州を獲得してから、中原経営に失敗して帰途に病没するま

だが、主として『資治通鑑』によりつつ略述されている。⑨ラリチェフ、テュリュミニナ J. B. Тюркина 「契丹の軍事」(九九—一二二頁)は、順治四(一六四七)年刊の滿州語訳『遼史』(レニングラード大学東洋学部図書館所蔵)から兵制に関する記事を抜き出し、契丹の軍事について述べたものである。⑩メドヴェヂェフ B. E. Медведев 「ナヂェジヂンスユエ村の墓地の発掘資料」(一一三—一二二頁)は、アムール川中流域ユダヤ人自治州東南部ビラ川のはとりにある、女真の埋葬遺跡の発掘報告で、北宋の「咸平元宝」の出土が注目される。⑪クイチャノフ E. M. Качапов 「タングート人の对中国観(タングート語一次史料による)」(一四三—一四七頁)は、西夏語で書かれた頌詩などに基いて、タングート人が中国に対して或る種の敵意を抱きつつも、経済・文化的には相互交流に意を用いていたことを述べている。⑫モモト B. I. Момот 「極東の中世諸遺跡出土の貨幣」(一四八—一五五頁)は、ソ連邦の沿海州と中国の東北地区とで発見された北宋銭を年代順に図示し、遺跡の年代決定のさいの手引としたものである。⑬ルボーレスニチェニコ E. M. Лубовицкий 「ミヌシンスク盆地出土の極東の貨幣(ミヌシンスク博物館の資料による)」(一五六—一六九頁)では、同博物館所蔵の中国貨幣(明代まで)四—五枚が紹介されている。そのうちわけは、唐以前一八枚、唐代三三六枚(うち開元通宝三一九

一枚、乾元重宝八枚、順天元宝二枚、大曆元宝二枚、建中通宝五枚)、北宋代三七枚、南宋代四枚、金代八枚、元代一枚、明代一枚である。これは、南シベリアと中国との経済的交流を考えるうえで貴重な資料と言えよう。

⑭クイズランフ J.P. Karasov 「初期モンゴル人(中世文化の源流の問題について)」(一七〇—一七七頁)は、九一〇世紀頃までのモンゴル人を森林の狩猟・漁撈民とみなし、その当時の住居形式(炕をもち、プランが方形の住居)の伝統が、帝国成立以後にモンゴリアや金帳汗国領内に建設された諸都市の住居にもうけつがれたと考えている。⑮アセエフ И.В. Асеев 「初期モンゴル人の埋葬について」(一七八—一八七頁)は、モンゴリア東北部チョイバルサン市から東へ四〇キロメートルのケルレン川右岸の墳墓四基と、ホオルトゥン・トル Ходгын-Тол 地区の墳墓二基の発掘報告で、このうち四基が、一〇—一二世紀に比定されている。⑯リンチェン В. Ринчен 「モンゴルのシャマニズムにおける歴史的人物の崇拜」(一八八—一九五頁)は、モンゴルのシャマニズムがけつして原始的な宗教ではなく、文字で書かれた「聖典」をもっていったことを強調し、それらや口碑伝承の中にチンギスハンとその妻・兄弟などを讃える文句があることを指摘している。⑰ダライ У. Далай 「元帝国時代モンゴル史の若干の問題」(二九六—二〇二頁)は、『元史』をはじめモンゴル史

に関する中国史料の研究史を概観して、元代のモンゴリアの歴史は元帝国とはきりはなして考察するべきであることを主張し、一三—一四世紀の全モンゴル人の人口についても触れている。⑱クズネツォフ В.С. Кузнецов 「明帝国と満州(一五一—一七世紀)」(二〇三—二二五頁)では、一五世紀初頭に明が遼東に進出してから以後ヌルハチがサルフの戦い(一六一九年)で明軍を撃破するまでの明・女真交渉史が、年代を追って詳述されている。⑲シレンドゥイブ В. Шлендаев 「モンゴリアにおける土地所有関係の歴史の若干の問題」(二二六—二三四頁)は、遊牧社会の特殊性はみとめつつも、やはり土地が主要な生産基盤であることを確認したうえで、清朝治下とボグド・ゲゲン政権下のモンゴリアにおける土地制度を、モンゴル国立文書局所蔵の満州語文書に拠って述べたものである。

最後に、本書全体を通して感じたことを二点あげておきたい。一つは、考古学資料や出土文書を利用した論文に、注目すべき成果が見られることである。文献史料の少ない分野では、今後さらにそれらの蓄積が期待される。いま一つは、中国と隣接諸民族との交渉史をあつかった論文の中に、中国に對するあからさまな非難が見られることである。それはまず編者の序文の中にあらわれている。編者は、突厥のビルゲ可

汗が、その碑文の冒頭で、突厥の民にたいして、中国人の「甘き」言葉にあなむかれぬよう警告したつぎの一句「甘きその言に、柔らかきその絹布に欺かれて、多きテュルクの民、死せり汝！……その地（中国）に行かば、テュルクの民よ！死せん汝！」を引用して、序文をしめくくっているのである。政治が学問に優先するお国柄とはいえず、このような学術論文集の中にも中ソ対立の色濃い影を見て、その根の深さを感ぜないわけにはいかない。

## 註

- (1) 同研究所については、加藤九祚「ユーラシア学の旅」『ユーラシア』八、一九七三、菊池俊彦「シベリアの考古学研究を訪ねて」『北大史学』一六、一九七六にくわし。
- (2) Центральная Азия и Тибет. Новосибирск, 1972.
- (3) А.Г. Малавкин. Материалы по истории уйгуров в IX-XII вв. Новосибирск, 1974.
- (4) Сибирь, Центральная Азия и Восточная Азия в древности. Новосибирск, 1976.
- (5) Г.И. Кашина. Керамика культуры яншао. Новосибирск, 1977.
- (6) なお同刊本の「天祚帝紀」のロシア語訳が、同じ筆者

批評と紹介 辻

らによって発表されている (Д.В. Тюромина, В.Е. Ларичев, Е.П. Дебелева, Гибель империи Дзо. «Бронзовый и железный век Сибири» (Древняя Сибирь, вып. 4). Новосибирск, 1974, сс. 225-260)。

Сибирь, Центральная и Восточная Азия в средние века (История и культура востока Азии, том III), Новосибирск, 1975, 236 стр.

ヴァースデーヴァ・アーシユラマ著、

P・オリヴェル出版・翻訳

## ヤティダルマ・プラカーシヤ

(遁世者の生活規定)

辻 直 四 郎

本書は二部からなり、第一部(以下 Pt. 1 と呼ぶ)は序文 (p. 15-28) とサンスクリット本文 (p. 29-109) のほか、三種の附録、索引を載せ、第二部 (Pt. 2) は序文 (p. 19-51) と英訳 (p. 53-205) ならびに二種の附録、索引を含んでいる。

現世を厭離して出家遁世することは、インドの大宗教のいずれにも見られる風習である。仏教およびジャイナ教については、周知の事実であり、文献も豊富に存するから、すで